

中国茶の歴史と現在の茶館

日中経済協会上海事務所大分県経済交流室

(大分県上海事務所所長) 後藤 純治

中国といえば皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？中国四千年の歴史、万里の長城、大自然、人口14億人…など様々あると思いますが、今回は中国茶の話題についてお伝えしたいと思います。

中国茶の歴史は非常に長く、紀元前2700年頃にまで遡るとされています。伝説によると、神農氏が茶を発見したとされ、彼は薬草を試す際に茶の葉を偶然口にし、その解毒効果に気づいたことが始まりと言われていています。その後、お茶は薬用から食用へ、唐の時代には一般的な飲み物となりました。

中国茶の分類は、発酵度の違いにより、緑茶、白茶、黄茶、青茶（烏龍茶）、紅茶、黒茶の6種類に分かれており、中国では緑茶の生産量が一番多くなっています。また、茶葉以外にも、お茶を入れる茶器にもこだわりがあり、中でも紫砂壺という陶器製の急須は重要な位置づけで、古くから愛用されています。

その紫砂壺の産地は、江蘇省宜興市で上海から高速鉄道で1時間半のところにあります。飲茶が一般的になった後の宋の時代に始まり、その独特の材質と機能が評価され今に繋がっています。市内には紫砂壺の博物館や商店が並び、今も産地として有名です。



宜兴市陶器博物館



紫砂壺工藝館



博物館紫砂壺展示



博物館紫砂壺展示

※写真は上海事務所スタッフ撮影

中国茶の歴史と現在の茶館

日中経済協会上海事務所大分県経済交流室

(大分県上海事務所所長) 後藤 純治

博物館には、歴代の名工による作品が展示されており、紫砂壺の歴史を知ることができます。



紫砂壺工芸通り



紫砂壺販売店



色々な形の紫砂壺が販売



街中にはモニュメントも

工芸通りには数多くの紫砂壺販売店が並んでおり、バイヤーや観光客は気に入ったお店に入り店主と会話しています。紫砂壺は安いもので数百元（1元は約21円）から、高いものは1万元以上と高価なものまで多種多様です。

こうした長い歴史の中で、現在の茶館はどのようになっているのでしょうか？上海にある茶館を訪れてみました。

※写真は上海事務所スタッフ撮影

中国茶の歴史と現在の茶館

日中経済協会上海事務所大分県経済交流室

(大分県上海事務所所長) 後藤 純治



茶館入口



茶館店内

茶館の入口は昔の茶館をイメージした素朴で静かな雰囲気です。お店に入ると、紫砂壺や茶餅（茶葉を丸く固め包んだもの）が飾られており、観賞することができます。



茶室



茶室

茶室は椅子に座るタイプと掘りごたつのタイプがありました。好みによって選ぶことができます。掘りごたつタイプは日本の和室に近いイメージです。



紫砂壺を使用



茶葉（プーアル茶）

※写真は上海事務所スタッフ撮影

中国茶の歴史と現在の茶館

日中経済協会上海事務所大分県経済交流室

(大分県上海事務所所長) 後藤 純治

お茶を入れる茶器はやはり紫砂壺を使用していました。店主の話によると、1つの紫砂壺に1種類の茶葉を使い続けるのが良いそうで、これは紫砂壺の陶器が茶葉の成分を吸収し、同じ茶葉を使い続けることによって、紫砂壺に光沢が生まれ美しくなっていくとのことでした。育てていくイメージですね。プーアル茶を入れてもらいましたが、ほんのり甘味があり、柔らかく、苦みはなくさっぱりした味わいで、とても美味しかったです。

今回は、中国茶の歴史と現在の茶館を紹介しました。上海市内には多くの茶館があり、古代をイメージしたものから最新のファッショナブルなものまで様々です。中国へ来るときは、ぜひ茶館に寄ってみて中国茶を味わってみてはいかがでしょうか？

※写真は上海事務所スタッフ撮影